

## 日本の伝統建築技術がユネスコ無形文化遺産に登録される

令和3年2月1日

内海春樹

歴史探訪会の例会では、世界で最も古い木造建築である法隆寺や、復原された平城宮大極殿など神社仏閣やお城・古墳・古民家などを学ぶことがとても多いですね。しかしこれらもほったらかしのままではいつか壊れ、崩壊していたはず。わが国では、日本史を彩る建築などを支えてきた職人の技が引き継がれていました。

### “技術を守らずして文化財は残せない”

2020年12月国連教育科学文化機関(ユネスコ)の無形文化遺産への登録が決まった「伝統建築工匠の技、木造建築物受け継ぐための伝統技術」では、時代時代の環境に合わせ継承に努めた17の技術が評価されたものです。



法隆寺 金堂、中門、五重塔 いずれも国宝（世界最古で最大の木造建築物）

607年聖徳太子が亡き父“用明天皇”を忍ぶために建設された。670年火災により全焼したが、奈良時代初頭に今の西院(上の写真の部分を中心とした伽藍)が再建された。その後、斑鳩宮があった所に夢殿を中心とした東院が完成した。

1. 古代の日本に朝鮮半島から土器製作、農工技術、土木技術、養蚕、機織り、漢字、仏教、医学などの新しい文化や技術を持って多くの人たちが渡来してきました。これらの人を「渡来人」と呼んでいるが、実はわたしたち日本人の祖先でもあります。彼らから伝えられた技術や知識によって、それまでの人々の生活が大きく変化し、また政治の中心地である都もつくられていきました。

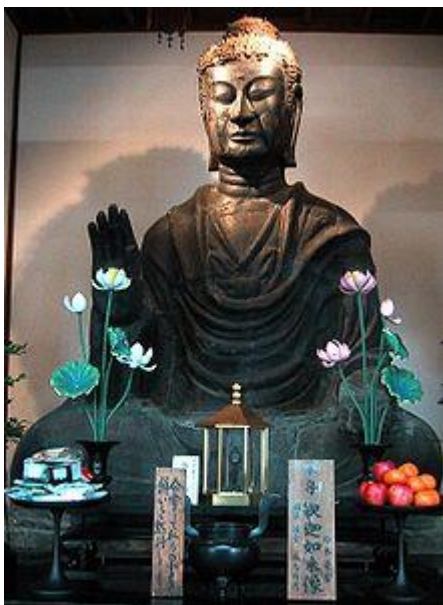
朝鮮半島では大きな動乱がたびたび起り、それから逃げるように日本に渡来し、製鉄の技術や鉄製の農具、灌漑(かんがい)技術などを伝えた人たちがいました。7世紀には、白村江の戦いで敗れた百済からの亡命者たちが大勢入ってきました。彼らはそれまでの日本にはない最新の技術や文化を伝えたり、朝廷の政治に大きく関わったりした。渡来人の持ち込んだ技術や文化によって当時の日本(倭国)は高度に発展したと言えます。

2. わが国初の寺院の建設は渡来人により成し遂げられた。

飛鳥寺(法興寺)は蘇我氏の氏寺として6世紀末から7世紀初頭にかけて造営されたもので、本格的な伽藍を備えた日本最初の本格仏教寺院である。『日本書紀』によれば崇峻天皇元年(588年)、百済から日本へ僧侶と技術者(寺工2名、鑪盤博士1名、瓦博士4名、画工1名)が派遣された。

(鑪盤博士は、仏塔の屋根上の相輪などの金属製部分を担当する工人とみられる)

続いてご本尊の飛鳥大仏も、渡来系の仏師“鞍作止利”によって造られた



推古天皇は(605年)摂政の聖徳太子に対して、飛鳥寺の本尊として、一丈六尺の金銅仏を制作するよう命じたが、その際に“鞍作止利”は造仏の工(担当者)に任せられ、翌推古天皇14年(606年)仏像は完成した。この様に仏教及び建築や仏像などの基本は全て中国・朝鮮などから伝えられたと言っても過言ではありません。

木造の建築方法は時代ごとに変遷を経て、技術的、技法的により高度なものとなっていく。大陸から流れてきた新しい知識や方法を取り入れ、なおかつ手先の器用な日本の職人達は、見事な建築物を造っていった。特に、神社や仏閣の建築を手がける「宮大工」と呼ばれる大工は高度な技術、技法を用いて素晴らしい神社や仏閣の建物や修理を行ってきた。

### 3. 伝説の宮大工(棟梁) 西岡常一 (1908年～1995年)

飛鳥時代の優れた木造建築技術を現代に伝える宮大工。数百年に一度という法隆寺の全伽藍解体大修理の棟梁を務め、奈良の名刹・薬師寺の金堂および西塔を1300年前の様式で再建させた。「宮大工は1000年先を見据えた仕事をしなければならぬ」など代々法隆寺大工棟梁に伝えられてきた口伝の数々を語る。



故西岡棟梁

#### <弟子の小川光男氏の言葉>

『法隆寺は中国や韓国から渡来した人の教えでつくったと言う人がいる。たしかに石の上に柱を置いたり、屋根を瓦で葺いたりするのは向こうの技術かもしれない。でも、法隆寺は中国あたりの建物とは全然違う。雨が少ないせいか中国には軒の短い建物が多い。それらに比べて法隆寺は基壇を高くして湿気を逃し、その上に軒を長くつくって雨を凌いでいる。これは雨が多く湿気も高い日本の気候風土に合わせてつくられているんだな。ここに日本人の賢さがある』

『まともな道具もない時代に、木工の技術に長け、これだけの建物をつくった大工がいたというのが凄い。どのようにして木が運ばれ、組まれ、建てられたのか。建てた「人」を思いながら見るのも大事なことです。本物だからこそ、いまここに残っている。ただ見るのではなく、1400年前のことを思い、感じてほしい。』

言葉の一つひとつに、先人への尊敬と宮大工という仕事への誇りを感じる。私たちの例会時も、これら先人たちの思いを感じながら学びたいものです。

#### 4. ユネスコに認定された無形文化遺産「伝統建築工匠の技」とは？

木・草・土などの自然素材を建築空間に生かす知恵、周期的な保存修理を見据えた材料の採取や再利用、健全な建築当初の部材とやむを得ず取り替える部材との調和や一体化を実現する高度な木工・屋根葺き・左官・装飾・畳など、建築遺産とともに古代から途絶えることなく伝統を受け継ぎながら、工夫を重ねて発展してきた伝統建築技術です。

国は、文化財保護制度によりそれを構成する 17 分野の技術を「選定保存技術」として保護しています。ここではその代表的な 9 件の技術を紹介します。

##### ・建造物修理

我が国における文化財建造物の保存修理は 120 年以上の伝統をもち、現在まで約 2,200 棟の建造物が根本修理を受けている。これらの建造物は 7 世紀から 20 世紀初頭まで約 1300 年にわたる各時代の遺構で、その種別は社寺、城郭等あらゆる分野にわたっており、構造も木造、石造、煉瓦等多岐にわたる。その保存修理に当たる技術者には高度な専門知識に基づく技術が要求される。

##### ・建造物木工

我が国の建造物は近年まで木造がその主流であり、したがって建築技術は木工技術によって代表され、それは世界に見られないほど精巧な成果を示すものである。しかし、近年では、古式の木工技術を体得する者は少なく、次第に技術水準が低下しつつある。特に文化財建造物の保存修理に当たっては、各時代の木工技術の正確な踏襲、再現が求められるところから、現在数少ない木工技能者が体得している古式の木工技術を伝承し、錬磨してその水準を確保する必要がある。



古式の木工技術による修理の様子

##### ・檜皮葺・柿葺(ひわだぶき・こけらぶき)

檜皮葺及びこけらぶきの技術は、神社仏閣の屋根葺き技術として我が国特有のものである。檜皮葺は 8 世紀の中ごろに既に用いられており、柿葺は古く発生した板葺きを源流とし、中世の末にはその技法が定着し大成したとみられている。現在、多数の檜皮葺・柿葺の建造物が重要文化財として保護されており、これらの建造物を保存するためには檜皮葺・柿葺の技術は欠くことのできないものである。

##### ・檜皮採取(ひわださいしゅ)

檜皮採取とは、社寺に多く見られる檜皮葺に用いるため、80 から 100 年生以上の檜の立木から、樹皮である檜皮を剥ぎ取る技術である。檜の立木の下部からヘラを入れ、上方にめくり上げ麻縄なわを巧みに使って足掛かりとして、高い木では 20 メートル以上まで登り剥いでいく。単独で山中深く入り、高い木に登る等、危険を伴い、採取した檜皮を担いで山裾まで下す等、重労働も要求される。現在重要文化財として保存されている檜皮葺の建造物を維持し、後世に伝えるためには檜皮採取の技術が欠くことが出来ない重要な技術である。



檜皮採取風景

#### ・建造物装飾(けんぞうぶつそうしょく)

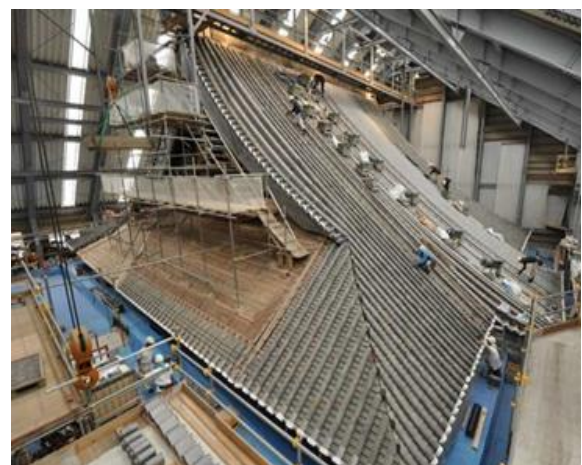
文化財建造物を装飾する技術には、漆塗り、彩色、飾り金具製作、鋳物製作、鍛冶技術などがある。特に仏教伝来とともに様々な技術が伝わって、古代仏堂が華麗に彩られるようになった。これらの技術は、建造物を装うという意匠性だけでなく、部材表面の風化抑制などの機能性も担っている。建造物の修理においては、その両者を考慮して適切な技法を吟味して施工する必要があり、そのためには豊富な知見と熟練が求められる。

#### ・建造物彩色(けんぞうぶつさいしき)

我が国における建造物彩色は、仏教の伝来とともに大陸から移入されたと考えられ、平安時代になると日本的なものとして洗練され、華麗な発達を遂げた。中世では仏塔の内部等にその伝統が受け継がれ、桃山時代には漆塗りを加えて建物内外ともに豪華絢爛な彩色を施す技法が発達した。近代以降、天然顔料の資源不足や技術者の減少などの課題に直面していたが、文化財を後世に継承していくためには不可欠な技術であり、保存会が技術者養成を担っている。

#### ・屋根瓦葺(本瓦葺)(やねがわらぶき(ほんかわらぶき))

寺院建築や城郭建築をはじめとする我が国の伝統的な建造物には本瓦ぶきが多く用いられている。本瓦葺の技術は、再用可能な古瓦をどこまで使用できるかを判別し、新しい瓦との調和のとれた使い方、雨や強風に対する対策を考え、軒の反りや屋根の優美な曲線を伝統的技術で葺き上げるためには、高度な判断と技能が要求されることから、文化財建造物の保存修理工事において最も重要な技術の一つである。現代においては、この技能を高度に体得した技能者は次第に減少しつつあるが、本瓦葺の技術は、本瓦葺の文化財建造物を後世に継承していくために欠くことのできない技術である。



#### ・左官(日本壁) (さかん(にほんかべ))

左官の職名は近世初期には見られ、それ以前には「泥工」「壁塗り」とも称された。我が国の伝統的左官技術には、表面を土で仕上げる古式京壁と、漆喰仕上げとする漆喰壁があり、日本壁と総称される。良質の日本壁を製作するためには、各種素材の吟味から施工まで高度な熟練が必要であり、文化財建造物修理においては、製作された壁の強度や美観が修理工事の良否に大きく影響する。しかし、日本壁製作のような湿式工法には十分な工期と経験が必要であるため、熟練した良質な日本壁を製作できる技術者を確保していく必要がある。

#### ・装潢修理技術(そうこうしゅうりぎじゅつ)

我が国では絵画、書跡、古文書などの文化財が、千数百年から数百年の永い年月を経て、今日に伝わっている。特に我が国伝来の書画類は四季の温湿度の影響を受けやすい紙や絹を主原料とするものが多く、特有の高温多湿の気象条件の下では、湿気、カビによる腐食や虫害による損傷が起こりやすく、必ずしも恵まれた環境とはいえない。こうした中で、多くの文化財が今日に伝えられたのは、優れた伝統的な保存修理技術:装潢(そうこう)の技によるところが大きい。

以上